

「史」における「記言の體」

——裴松之『三國志』注の懊惱——

渡邊義浩

はじめに

物語と歴史との違い、それは「三國志」では、『三國志演義』と『三國志』の違いとして、前者は虚構を含み、後者は史実を記すと説明される。果たして、そのように截然と区別できるものなのであろうか。西晉の陳壽が著した『三國志』に注を付けた劉宋の裴松之は、正しい史実を求めて、実に二百十種以上に及ぶ書籍を注に引用して^①、本文および引用書の史料批判を行ったという^②。引用された書籍の中には、干寶の『搜神記』のように、後世には小説、すなわち『三國志演義』と同じような虚構を含む小説に分類されるものもある。林田愼之助は、そうした書籍をも収録する裴松之の目配りを「複眼」と称し、そこに裴松之注の特徴を求め^③る。

しかし、裴松之は「複眼」を意識して、『搜神記』を収録した訳ではあるまい。『搜神記』は当時、「史」部の書籍であり、それが歐

陽脩の『新唐書』より「子」部の小説類に移動するのは、唐宋間における天人相關説から天理説へという天観の変化に理由がある^④。事実、引用する書籍に史実としての正しさが欠ける場合、厳しくそれを指摘する裴松之が、引用した『搜神記』を史料批判することはない。

問題は、「史」の中に内在する小説的な要素にある。今日の「近代歴史学」から見れば、虚構と判断し得るものが、「史」部の書籍の中には多く含まれる。そこには、物語と歴史の未分化という問題が横たわっているのである。本稿は、それに敢然として立ち向かった裴松之の「記言の體」への結論に、中国の「史」における物語の問題を考えていく端緒を求めよう。

一、発言の記録者と「史」の伝達

石井仁の言葉を借りれば、曹操は「參謀本部」のような軍師集団

を幕下に抱えていたが、その頂点に軍師として君臨したものが荀攸である。その曹操幕下での働きについて、『三國志』は次のように記述している。

(荀) 攸 深密にして智防有り、太祖の征伐に従ひてより、常に帷幄に謀謨するも、^① 時人及び子弟も其の言ふ所を知るもの莫し。……公達 前後に凡そ奇策を畫すること十二、^② 唯だ(鍾) 繇のみ之を知る。繇 集を撰するも未だ就らず、會、薨ず。故に^③ 世に盡く聞するを得ざるなり。^④

陳壽によれば、荀攸は「智」だけではなく「防」もあつたので、帷幄で立てた謀略について、^① 「時人」も「子弟」もその発言内容を知らなかつた。荀攸の立てた「奇策」十二を知っていた者は、^② 鍾繇だけであつた、という。しかし、鍾繇は『荀攸集』を完成できずに薨去し、その結果、荀攸の言葉と謀略は、^③ 世にすべて聞くことができなかつた、とするのである。

これに対して、裴松之は注をつけて、次のような見解を示している。

臣 松之 案ずるに、「^① 攸 亡せしの後 十六年にして、鍾繇乃ち卒す。^② 攸の奇策を撰するに、亦た何ぞ難きことか有らん。而るに年 八十に造るに、猶ほ未だ就らずと云ふ。遂て攸の^③ 從征・機策の謀をして世に傳はらざらしむ、惜しいかな」と。

裴松之は、荀攸が没してから鍾繇が卒するまで、^① 十六年の歲月があり、その間、鍾繇が^② 荀攸の奇策を撰述することは、難しくな

かつたはずである。しかし、『荀攸集』はならず、^③ 荀攸の奇策は世に伝わっていない、惜しいものである、と述べている。

陳壽が本文において、荀攸の言葉と謀略は、世に全く伝わらなかつた、と記しているため、「惜しいかな」という感想に裴松之は止めているが、^② 「何ぞ難きことか有らん」という強い語調には、裴松之の疑問が内在される。それは、陳壽が同じ荀攸傳において、荀攸の奇策と思しきものと荀攸の言葉を明示しているためである。

太祖 白馬を抜きて還り、輜重を遣はし河に循ひて西せしむ。袁紹 河を渡りて追ひ、卒に太祖と遇ふ。諸將は皆恐れ、太祖に還りて營を保つを説く。攸曰く、^① 「此れ敵を禽とする所以なり、奈何ぞ之を去らん」と。^② 太祖 攸に目して笑ふ。遂て輜重を以て賊に餌をあたふ。賊 競ひて之に奔り、陳亂る。乃ち步騎を縦ちて撃ち、大いに之を破り、其の騎將たる文醜を斬る。太祖 遂て紹と相 官渡に拒ぐ。軍の食方に盡きんとし、攸 太祖に言ひて曰く、「紹の運車 旦暮く至らん。其の將たる^③ 韓萇 銳にして敵を輕ずれば、撃ちて破る可きなり」と。太祖曰く、「誰か使はす可きものぞ」と。攸曰く、「徐晃なれば可なり」と。^④

官渡の戦いの前哨戦、曹操は關羽に白馬で顔良を斬らせると、黄河に沿って延津に戻ってきた。袁紹の騎兵を率いて文醜が攻め寄せると、輜重を心配する諸將に荀攸は、^① これは敵を禽とするためである、どうしてこれを去ろうかと言ったという。^② 曹操が荀攸に目

配せして笑っているのであるから、曹操と熟慮した「奇策」なのであろう。そうして文醜を討ち取ったのち、荀攸は袁紹の運穀車を指揮する③「韓萇」を狙う。この人物について、裴松之は次のように述べている。

臣松之 諸書を案ずるに、韓萇 或いは韓猛に作り、或いは韓若と云ふ、未だ孰れが是なるかを詳にせず。

裴松之によれば、運穀車を襲撃する話は陳壽の『三國志』に載るだけでなく、諸書に記され、「韓萇」は「韓猛」や「韓若」につくる本があったという。荀攸の「奇策」は諸書に記されていたのである。そして、荀攸傳では、「運車」とあるのに、なぜ「運穀車」と限定できるのかと言え、武帝紀にはそう記載されるためである。

袁紹の運穀車 數千乘 至る。公荀攸の計を用ひて、徐晃・史渙を遣はして邀撃せしめ、大いに之を破り、盡く其の車を燒く。

陳壽は、武帝紀には、これが「荀攸の計」であることを明記しているのである。荀攸傳には、荀攸の発言も奇策も伝わらない、と書いたにも拘らず、陳壽自身の『三國志』、さらには裴松之が見た諸書にも、荀攸の発言と奇策が記されるのはなぜか。裴松之は、それを直接には語らない。鍾繇が編纂中であつたという『荀攸集』の編纂中に漏れたのか。秘匿されたのは、この程度の概略ではなく、詳細な内容を持っていたのか。あるいは史家の捏造であるのか。

陳壽の『三國志』に「異聞」を集めるといふ独自の的方法論で注をつけた裴松之は、こうした諸史料間の矛盾に対して、一見「近代歴

史学」の史料批判にも似た、独自の的方法論を創造していた。

二、「理」による史料批判

裴松之は、劉宋の元嘉六（四二九）年七月二十四日、『三國志』注の完成に伴い、「上三國志注表」を劉宋の文帝に上奏し、自らの注の特徴を次のように述べている。

按ずるに、三國は年を歴ること遠からずと雖も、事は漢・晉に關はり、首尾の涉る所は、百載に出入す。注記は紛錯して、毎に舛互すること多し。其れ壽の載せざる所も、事宜しく存録すべき者は、則ち①畢く取りて以て其の闕を補はざるは罔し。

或いは同じく一事を説くも、辭に乖雜有り、或いは事を出だすに異に本づき、疑ひ判ずる能はざれば、竝びに皆内に抄して以て②異聞を備ふ。若し乃ち紕繆顯然として、言理に附せざれば、則ち違に隨ひて矯正して以て③其の妄を懲らす。其れ時事の當否、及び壽の小失は、頗る愚意を以て④論辯する所有り。

このように裴松之は、①補闕・②備異・③懲妄・④論辯という四種の体例に基づき『三國志』に注を附している。裴松之は、本文を絶対視する經學の注に対して、これらのうち、本文と異なる説を引く②備異と、本文および引用史料の誤りを訂正する③懲妄により本文の内的史料批判を行い、また史実と史書への論評である④論辯により外的史料批判を展開して、「史」の自立を果たしたのである。

その際、留意すべきことは、裴松之注が、いわゆる「近代歴史学」とは相容れない、史料批判の基準を有したことである。③懲妄の事例より検討しよう。

山陽公載記に曰く、「(馬)超(劉)備が待するの厚きを見るに因り、備と與に言ふに、常に備の字を呼ぶ。關羽怒り、之を殺さんと請ふ。備曰く、「人窮し來りて我に歸す。卿ら怒るに、我が字を呼ぶを以てす。故にして之を殺さば、何を以て天下に示すや」と。張飛曰く、「是の如くんば、當に之に示すに禮を以てせん」と。明日大いに會し、超に入るを請ふ。羽・飛並びに刀を杖て立ち直る。超坐席を顧るに、羽・飛を見ず。其の直るを見るや、乃ち大いに驚き、遂に一たびだに復た備の字を呼ばず。明日歎じて曰く、「我今にして乃ち其の敗るる所以を知る。人の主の字を呼ぶが爲に、幾ど關羽・張飛の殺す所と爲る」と。自後乃ち尊びて備に事ふ」と。¹³⁾

袁暉の『山陽公載記』によれば、馬超は劉備の優遇を良いことに劉備を字の玄德で呼び、關羽が怒ってこれを殺そうとすると、劉備が止めた。そこで關羽と張飛は、刀をついて劉備の脇に侍立し、馬超に威厳を示し、馬超は自らの至らなさを悟ったという。これに對して、裴松之は、次のように述べて、その妄を懲らす。

臣松之按するに、以爲へらく、超は窮するを以て備に歸し、其の爵位を受く。何ぞ傲慢にして備の字を呼ぶを容なふや。且つ備の蜀に入るや、關羽を留めて荊州に鎮せしむ。羽未だ嘗

て益土に在らざるなり。故に羽馬超の歸降せるを聞き、書を以て諸葛亮に超の人才誰に比類す可しと問ふ。書の云ふ所の如きを得ず。羽焉んぞ張飛と與に立ち直るを得んや。凡そ人の事を行ふは、皆其の可なるを謂ひてするなり。其の不可なるを知らば、則ち之を行はず。超若し果たして備の字を呼ばば、亦た理に於て宜しく爾すべしと謂へばなり。就令羽超を殺すを請ふも、超は應に聞くべからず。但だ二子の立ち直るを見、何に由りて便ちに字を呼ぶの故を以てすと知り、幾んど關・張の殺す所と爲ると云ふや。言の理を經ざるは、深く忿疾す可きなり。袁暉・樂資らの諸々の記載する所、穢雜虛謬なること、此の類の若きは、殆ど勝けて言ふ可からざるなり。¹⁴⁾

裴松之は、馬超が劉備の字を呼び得るような政治情況になかったことに加え、關羽が一度も益州に居たことがなく、張飛と共に侍立し得ないと、『山陽公載記』の記述を論理的に反証する。そのうえで、「言の理を經ざるは、深く忿疾す可き」であると主張する。すなわち、袁暉や樂資たちの記す多くのものが、言葉としての「理」を經ないことは、深く憂慮すべきとして、猥雑で虚偽誤謬があると厳しく批判するのである。では、叙述における論理性としての「理」があるか否かは、何により判断されるのか。それはその言葉が經書に基づくか否かではない。史家としての裴松之の「理」に照らして是否が判断される。

そうした意味で、物語的歴史の破綻を「理」を經ないものとする

裴松之の批判は、自らの「理」に基づく自律的な批判、あるいは主体的な史料批判と言えよう。それは、王肅の感生帝説批判に見られるような、人間としての「理」に基づく判断であった。⁽¹⁵⁾

ただし、それは、恣意的な偏向を持つ非客観的な、非「近代」的な史料批判でもある。「經」に跪くことを止め、あくまでも自分の「理」に照らして正しい「史」を追究する人間としての本性がそこにある。⁽¹⁶⁾④論辯のうち、他の史書への批判を検討すると、その恣意性は明確となる。

袴田郁一が明らかにしたように、⁽¹⁶⁾裴松之が④論辯において批判の対象とするものは、孫盛『魏氏春秋』、張璠『後漢紀』、虞溥『江表傳』、郭頒『魏晉世語』、王沈『魏書』、樂資『山陽公載記』、袁暉『獻帝春秋』、張薦『文士傳』、作者不明の『孫資別傳』・『魏末傳』の十書であり、判明する著者は、ほぼ寒門の出身である。裴松之は、名門「河東の裴氏」⁽¹⁷⁾の存立基盤として「史」の卓越性を文化資本にしようとしていた（注(12)所掲渡邊論文）。西晉の杜預は、「史」官の重要性を孔子に準えている。⁽¹⁸⁾そうしたなか、張紘と共に呉に逃れた袁迪の孫である袁暉、西晉の著作郎となったものの祖先も不明な樂資が、「史」の編纂を欲しのままにすることなど、裴松之の認め得るものではなかった。

（樂）資・（袁）暉の徒、⁽¹⁾竟に何人爲るか知らざるも、未だ

⁽²⁾然否を識別する能はざりて、輕しく翰墨を弄び、妄りに異端を生みて、以て其の書を行はしむ。此の如きの類、正に以て視

「史」における「記言の體」

聽を誣罔し、後生を疑誤せしめんとするに足らん。寔に⁽³⁾史籍の罪人にして、達學の取らざる所の者なり。⁽¹⁹⁾

裴松之の樂資や袁暉など①「何人爲るか知らざる」という口吻は、「史」を担うべき名門「河東の裴氏」の矜恃を感じることができよう。裴松之は、かれらが②事の是非を判断できずに、「異端」を生み出して、世間を惑わすことが我慢ならなかった。③「史籍の罪人」という断罪は、そうした裴松之の怒りの表現である。

とりわけ、裴松之はそうした「異端」が國史に採用されることを憂慮した。

案ずるに張璠・虞溥・郭頒は皆晉の令史たり。璠・頒は出でて官長と爲り、溥は鄱陽内史たり。璠は後漢紀を撰し、未だ成らざるが似しと雖も、辭藻觀る可し。溥は江表傳を著し、亦た粗ば條貫有り。惟だ頒は魏晉世語を撰し、⁽¹⁾蹇乏にして全く宮商無く、最も鄙劣爲るも、時に異事有るを以て、故に頗る世に行はる。⁽²⁾干寶・孫盛ら多く其の言を采りて以て晉書を爲る。其の中虚錯の此の如き者、往往にして之れ有り。⁽²⁰⁾

裴松之は、郭頒の『魏晉世語』が①才能もなく、バランスが悪く、最も劣っているのに、ときどき「異事」があることから世に流行し、⁽²⁾干寶・孫盛らの晉の國史にその記事が採用されていることを危惧する。

客観的な史実を説明するための史料批判を行う「近代歴史学」とは異なり、『春秋左氏傳』を祖と仰ぐ中国の「史」は、春秋學の尊

重する「春秋の義」の中でも、勸善懲惡を明らかにし、国政の鑑とするために「史」を描く⁽²¹⁾。したがって、記述内容が国家の正統性に関わる記述に虚偽が含まれること、国家の正統性を論ずる史論が誤っていることは、裴松之にとつて許しがたいことであつた。

換言すれば、国家の正統性を示すためであれば、記述内容が客観的な史実と異なつていても、それは「正しい」記述となる。儒教との関わりの中で展開する中国の「史」は、客観的な史実としての正しさを求めるものではなく、国家の正統性を示すものであつた⁽²²⁾。したがつて、裴松之は、「劉」と「漢」に肩入れする。裴松之の注が、劉宋の文帝の敕撰注であり、劉宋の開祖劉裕が漢の子孫と自称したことを考えれば、それは自明のことであろう。注(16)所掲袴田論文も指摘するように、裴松之が漢を最後に守ろうとした荀彧を高く評価することは、劉宋の史家に共通する傾向であり、雑喉潤が指摘する⁽²³⁾、蜀漢を支え続けた諸葛亮を高く評価するという裴松之注の特徴もそこに理由がある。あるいは、別傳の恣意性を批判しながらも、陳壽の趙雲傳に比べて、趙雲を非常によく描く『趙雲別傳』を趙雲傳の字数以上に多く引用して、史料批判を行わないことも、同様の文脈で説明し得る。

ここでは、蜀漢滅亡時に、漢を守ろうとした姜維に対する孫盛の批判と、それに対する裴松之の反論を掲げておこう。

孫盛の晉陽秋に曰く、「盛 永和の初めを以て安西將軍の蜀を平らぐに従ひ、諸々の故老を見るに、姜維 既に降りしの後、密

かに劉禪に表疏を與へ、僞服して鍾會に事へ、困りて之を殺して以て蜀土を復さんと欲するも、會の事捷たず、遂に泯滅に至るを説くに及ぶや、蜀人今に於ても之を傷む。盛 以爲ふに古人云へらく、困しむ所に非ずして焉に困しまば、名は必ず辱められ、據る所に非ずして焉に據らば、身は必ず危ふしと。既に辱められ且つ危ふきは、死 其れ將に至らんとは、其れ姜維の謂なるか。鄧艾の江由に入るや、士衆 鮮少きも、維 進みては懸竹の下に節を奮ふ能はず、退きては五將を總帥して、蜀主を擁衛し、後圖の計を思ふ能はず。而るに乃ち逆順の間を反覆し、情に違ひて冀ひ難きの會に希ひ、衰弱の國を以てして、屢々兵を三秦に觀、已に滅びしの邦もて、理外の奇擧を冀ふは、亦た闇からずや⁽²⁴⁾と。

桓温の成漢への遠征に従軍した孫盛は、蜀人がいまだに姜維を追憶することを疑問視し、姜維が鍾會に偽降して、蜀漢の復興を図つたことを「理外の奇擧を冀ふ」ものとして暗愚とする。桓温のとき、ようやく蜀を奪回した東晉の立場を反映して、あくまでも蜀に固執した姜維を批判する史論と言えよう⁽²⁵⁾。

これに対して、裴松之は、次のように「論辯」している。

臣 松之 以爲へらく、「(孫)盛の(姜)維を譏るは、又當たらずと爲す。時に于て鍾會の大衆、既に劍閣に造り、維 諸將と與に營を列ねて險を守らば、會 進むを得ず、已に還るの計を議す。蜀を全くするの功、幾んど立たんとす。但だ鄧艾詭

道より傍入し、其の後ろに出でなば、諸葛瞻既に敗れ、成都自ら潰ゆ。維若し軍を回らせ内を救はば、則ち會其の背に乗ぜん。當時の勢、焉んぞ兩濟を得んや。而るに維を責むるに縣竹に奮節し、蜀主を擁衛する能はずとするは、其の理に非ざるなり。會盡く魏將を坑して以て大事を擧げんと欲して、維に重兵を授け、前驅と爲さしむ。若し魏將をして皆死し、兵事を維の手に在らしむれば、會を殺し蜀を復するは、難きと爲さず。夫れ功は理の外に成して、然る後に奇と爲す。事に差牙有るを以てして、抑けて然らずと謂ふ可からず。設使田單の計、邂逅會せずんば、復た之を愚闇と謂ふ可けんや」と。⁽²⁶⁾

このように裴松之は、漢を守ろうとした姜維への批判を孫盛の「理」の破綻を指摘することで、論破する。「妄懲」と同様、「論辯」においても、裴松之の論拠が自らの内なる「理」に置かれていることを理解できよう。

それでも二百十種に及ぶと言われる裴松之の引用書の中で、孫盛の著作や史論は多く引用される部類に属する。裴松之には、孫盛へのこだわりがある。それは孫盛の著作と関わる中で、裴松之が史家として懊悩を抱えたためなのではないか。

三、懊悩する裴松之

自らの「理」により、史書の正しさを判断する裴松之は、やがて

史家の辿り着く最終地点で懊悩する。自ら歴史を見聞して記録することの少ない史家は、何らかの史料をもとに自らの史書を構築するが、たとえば歴史上の人物の発言について、誰がその言葉を聞き、それがどう伝わったのか、明らかにできないことに悩む。「述べて作ら」ない伝統を持ち、儒教の圧倒的影響下で史書を執筆する中国の史家に限定すると、それは、先行する諸史料の是非を検討した際に、ある人物の発言が単なる捏造ではなく、經書をもとに構築されている場合に、「記言の體」(発言を記録した体裁)をどのように読み解くべきか、という問題になる。

具体的には、『春秋左氏傳』の言葉を用いて、ある人物の発言を作り上げている場合、それを是とすべきか非とすべきかという問題に、裴松之は懊悩した。その際、解決可能の場合もある。「記言の體」に矛盾がある場合には、それを指摘することで、懊悩から逃れることができる。それが孫盛の事例であった。

孫盛の魏氏春秋に云ふ、「諸將に答へて曰く、「劉備は、人傑なり。^①將に生きながら寡人を憂へしめんとす」と。臣松之、以爲へらく、^②史の言を記すは、既に潤色多し。故に前載の述ぶる所に、實に非ざる者有り。^③後の作者、又意を生じて之を改む。實を失ふや、亦た彌々遠からざらんや。凡そ孫盛書を製るに、^④多く左氏を用ひて、以て舊文を易ふ。此の如き者は一に非ず。嗟乎、^⑤後の學者、將た何くにか信を取らん。且つ^⑥魏武方に天下を以て志を勵ますに、而るに夫差の死を

分くるの言を用ふるは、尤も其の類に非ざるなり。²⁷

孫盛の『魏氏春秋』に載せる曹操の「劉備は、人傑である。①將來寡人を憂えさせるだろう」という言葉は、『春秋左氏傳』哀公傳二十一年に基づいている。

王拜稽首して曰く、「寡人は不佞なれば、越に事ふる能はずして、以て大夫の憂ひと爲る。命の辱かたじけなきを拜す」と。之に一筆の珠を與へ、趙孟に問おらしめて曰く、「句踐⁶將に生きながら寡人を憂へしめんとす。寡人 之に死なんとするも得ず」と。²⁸

越王の句踐に包圍され、追い詰められた吳王の夫差は、晉の使者である楚隆（大夫）に対して、句踐は⑥「生かしておいて私を苦しめようとしているのである」と訴えかけた。それを孫盛の『魏氏春秋』は、劉備に対する曹操の言葉として、「劉備は生かしておいて私を苦しめようとしているのである」と使っているのである。曹操は劉備に包圍されている訳ではないので、明らかに使い方がおかしい。したがって、訳は①「將來寡人を憂えさせるだろう」といった解釈にせざるを得ない。完全な典拠の誤用であるが、問題はそこにはない。曹操は果たして、まるまる『春秋左氏傳』と同じ言葉を典拠とは異なる矛盾した形で引用しながら、述べたのであろうか。

裴松之は、⑤魏武が天下に大志を逞しくしているときに、夫差が死を覚悟したときの言葉を用いているという矛盾を厳しく批判する。そして、裴松之は、②「史の言を記すは、既に潤色多」と深刻なことを述べている。曹操はこのような言葉は発言していない、とす

るのである。しかも、③「後の作者、又意を生して之を改」めるので、さらに実態から乖離すると言うのである。それが、孫盛の場合、④『春秋左氏傳』を用いて改めているものが一つではない、と裴松之は述べる。その場合「史」の正しさは、どのように保障されるのであろうか。

たしかに、曹操の言葉として『三國志演義』では大きく取り上げられる次の史料も、孫盛の『雜記』になって、突然曹操が話し出す。魏書に曰く、「太祖 卓の終に必ず覆敗せんことを以て、遂に就き拜せず、郷里に逃歸す。數騎を從へ、故人たる成臯の呂伯奢に過ぎるも、伯奢 在らず。其の子 賓客と與に共に太祖を劫かし、馬及び物を取る。太祖 手づから刃もて數人を撃ち殺す」と。世語に曰く、「太祖 伯奢に過ぎるも、伯奢 出行す。五子皆在り、賓主の禮を備ふ。太祖 自ら卓の命に背くを以て、其の己を圖るを疑ひ、手づから劍もて夜に八人を殺して去る」と。孫盛の雜記に曰く、「太祖 其の食器の聲むせを聞き、己を圖ると以爲おもひ、遂に夜に之を殺す。既にして悽愴として曰く、「寧ろ我 人に負まくも、人 我に負まかしむこと無からん」と、遂に行くと。」²⁹

結論的に言えば、孫盛『雜記』に記される曹操の言葉も、『春秋左氏傳』宣公 傳十二年をもとに捏造されたものである。楚と晉が戦っているおり、楚の孫叔敖は晉軍の車を見て、次のように言った。

孫叔曰く、「之を進めよ。^①寧ろ我 人に薄するも、人 我に薄すら

しむること無かれ。詩に云ふ、「元戎十乘、以て先づ行を啓く」とは、^②人に先んずるなり。軍志に曰く、「人に先だてば人の心を奪ふ有り」とは、之に薄るなり。遂て疾く師を進め、車は馳せ卒は奔り、晉軍に乗ず。^{③④}

孫盛の『雜記』に記す曹操の言辭は、孫叔敖の言葉の①「薄」を「負」に代えたものであることが分かる。ここでは、②「人に先んずる」という言葉の用い方の文脈が、曹操の情況と『春秋左氏傳』とで同じであることから、曹操の言葉に不自然さはない。このように考えると、「姦雄」曹操を代表する言葉として人口に膾炙した「寧ろ我人に負くも、人我に負かしむこと無からん」は、曹操の言葉ではないことが分かるのである。

このように、戦乱だけではなく様々な「事」を記す『春秋左氏傳』は、歴史上の人物の發言を捏造する際に好都合であった。裴松之は、それが「記言」に使われることを憂慮する。もちろん、裴松之が『春秋』を尊重しなかつたわけではない。文帝曹丕が殺害した甄皇后について、病死と伝えて文帝の悪を隠蔽しようとした王沈の『魏書』について、裴松之は次のように「春秋の義」を援用し、厳しく批判している。

臣松之、以爲へらく、^①春秋の義、内には大悪は諱み、小悪は書かずと。文帝の甄氏を立てず、殺害を加ふるに及びては、事に明審有り。^②魏史、若し以ひて大悪と爲せば、則ち宜しく隠して言はざるべく、若し謂ひて小悪と爲せば、則ち應しく假

の辭して、虛文を崇飾すること乃ち是に至るべからず。舊史に聞く所に異なれり。此を推して言はば、其の十・甄諸後の言行の善を稱することも、皆以て實論とし難し。^③陳氏の刪落は、良に以有るなり。^④

①は文字に誤りがある。ここで引用する「春秋の義」は、『春秋公羊傳』隱公十年の「春秋は内を録して外を略す。外に於ては大悪は書き、小悪は書かず。内に於ては大悪は諱み、小悪は書く（春秋録内而略外。於外大悪書、小悪不書。於内大悪諱、小悪書）」である。後半の文意から考えても、「小悪不書」の「不」は衍字で、「小悪は書く」とすべきである。^②内の大悪は諱み、小悪は書くという「春秋の義」によれば、②文帝の甄氏殺害は諱んで書かないか（大悪）、はつきりと書く（小悪）べきである、と裴松之は主張する。そして、中途半端な虚偽を捏造した「魏史」（王沈の『魏書』）を批判し、③陳壽がその記事を採用しなかつたことを評価しているのである。

このように、裴松之もまた「春秋の義」を「史」の規範として尊重する。しかし、史実の正しさを「理」に基づいて探求した裴松之は、『春秋左氏傳』などの經書を利用して、「記言」が捏造されることを見逃せなかつた。

後世「竹林の七賢」に数えられる嵇康は、汲郡の共北山中で隱者の孫登に出会った。そのときにことについて、共に孫盛の史書である『晉陽秋』と『魏氏春秋』は、それぞれ次のように伝えている。

（嵇）康孫登に見ゆるも、登之に對ひて長く嘯き、時を踰え

て言はず。康辭し還らんとして曰く、「先生竟に言無きか」と。
登曰く、「惜しいかな」と。⁽³³⁾

『晉陽秋』は、孫登が嵇康に対して「惜しいかな」と言ったとする。これに対して、『魏氏春秋』は、次のように孫登が嵇康に言葉をかける。

(嵇) 康之と與に言はんと欲するも、登默然として對へず。時を踰へ將に去らんとし、康曰く、「先生竟に言無きか」と。

登乃ち曰く、「子才は多く識は寡し。難きかな今の世に免れんことを」と。⁽³⁴⁾

この両書の「記言」の違いに対して、裴松之は、次のように口ごもる。

此の二書は皆に孫盛の述ぶる所なるも、而も自づから殊異を爲すこと此の如し。⁽³⁵⁾

裴松之は、ともに孫盛の書である『晉陽秋』と『魏氏春秋』で、孫登の発言が異なる理由を口を濁して説明しない。言うまでもなく、これは後者の「記言」が『論語』雍也篇を典拠とする。

子曰く、「祝駝の佞有らずして、宋朝の美有るは、難きかな今の世に免れんことを」と。⁽³⁶⁾

ちなみに、この章は古注と新注で読みが異なり、朱子は「祝駝の佞有りて、宋朝の美有らずんば」と読んで、「不」を「祝駝の佞」と「宋朝の美」の双方にかける。孫盛は「才は多く識は寡し」と前文を創作しており、「多」と「寡」を対照的に、すなわち「不」を

双方にかけない古注と同様に『論語』を読んでいることが分かる。裴松之も、この間の事情が手に取るように分かったのではないか。それでも懊惱して語らない理由は、どこにあるのだろうか。

ただし、『論語』や『春秋左氏傳』といった誰でも学んでいる經書の場合には、捏造ではなく、実際に本人が言っている可能性もある。同じく孫盛の『魏氏春秋』に、『論語』を典拠として高貴郷公の曹髦が語る言葉を記す。曹髦が側近を従えて、司馬昭に対して兵を起し、王經らと会った場面である。

(帝) 遂て王經らを見、黄素の詔を懷より出して曰く、「是れ忍ぶ可くんば、孰れか忍ぶ可からざらん。今日は便ちに當に此の事を決行すべし」と。入りて太后に白し、遂て劍を抜き、雲龍門より出づ。⁽³⁷⁾

高貴郷公曹髦の言葉は、『論語』八佾篇の「孔子季氏を謂ふ、「八佾の舞庭に於てす。是れ忍ぶ可くんば、孰れか忍ぶ可からざらん」と(孔子謂季氏、八佾舞於庭。是可忍也、孰不可忍也)」と同じである。曹髦であれば、『論語』を修めていたに違ひなく、『論語』を典拠として発言することは不自然ではない。ただし、伝えるものは、孫盛の『魏氏春秋』である。「記言」は創作なのではなからうか。こうした思いに揺れながら、裴松之は懊惱する。高貴郷公曹髦を司馬昭が殺害させた際の陳泰の賈充を斬るべしとする発言を伝える『魏氏春秋』について述べながら、裴松之はとりあえず、次のよう

に主張する。

孫盛（陳）泰の言を改易するは、小しく（干實に）勝ると爲すと雖も、然れども盛の言の諸々の改易する所を檢べるに、皆^①別に異聞有るに非ず、率ね更めて自ら意を以て制し、多くは舊の如からず。凡そ^②記言の體は、當に其の口を出づるが若くせしむべし。辭勝りて實に違ふは、固より君子の取らざる所なり。況んや復た勝らずして徒らに長く虚妄なるをや。⁽³⁸⁾

裴松之は、孫盛が改変したさまざまな箇所を調べた結果、孫盛の改変の論拠に①「別に異聞有る」訳ではないことを確信する。すなわち、孫盛は、裴松之が注で試みているような「異聞」を求め、それを論拠に発言の内容を記載している訳ではない、と裴松之は孫盛の諸書を「論辯」するのである。したがって、②「記言」がその発言の当事者の言葉そのものではないことを裴松之も認めない訳にはいかなかった。そうであれば、せめて「記言の體は、當に其の口を出づるが若くせしむべし」、すなわち、人の言葉を記載するときには、その口から出たようにすべきことが「記言の體」である、と主張しているのである。孫盛の「記言」は、文辭が優れず、いたずらに冗長で誤っており、あまりにも目を引く。

裴松之は、多くの「異聞」を集め、自らの「理」に基づいて、その是非を判断していった結果、「記言」の捏造が多くの「史」で行われていることを感じた。しかし、それへの批判は、孫盛個人の問題として止めようとした。これをすべての史書に拡大していくと、

正しさを「理」により求めようとした裴松之の「史」は、信頼し得る根拠を喪失し、根底から行き詰まるためであろう。さらに言えば、虚構と史実との区別が消滅していく危険性がそこにはある。そうした危機を自覚しながらも、何が正しいのかを自らの「理」に基づき裴松之は問い続けた。それは、「史」の役割が、絶対的に正しい史実を求めるのではなく、国家の正統性や勸善懲惡といった「春秋の義」を示すことにあったが故に可能となる折り合いであった。ここに、客観的な史実を探求する「近代歴史学」とは異なる、「古典中國」における「史」の自立を求めることができるのである。

おわりに

英雄物語は、「史」の華であるが、「記言」を中心に、そこには虚構が見られる。「異聞」を広く集め、史料批判を行った裴松之は、そのことに明確に気づいていた。勸善懲惡や国家の正統化という「古典中國」における「史」の目的が果たし得て、物語としての整合性が取れていれば、それは「史」として成立し得る。果たして、裴松之の思いはそこに落ち付き、揺れることはなかったのであるうか。

そうであれば、「史」は、物語に近づき、史実とは離れていく。しかも、「異聞」が持て囃され、他とは変わった記述が尊重されていく中で、無責任な史書が量産されていけば、「史」は物語となる。

さらに、その物語が経であり、「史」の淵源として尊重される『春秋左氏傳』に基づくものであれば、その危険性はさらに高まる。合理的に捏造された「經」を典拠とする物語、たとえば玄鳥の卵から人が生まれる物語を『詩經』に書かれるから正しいとする唐の劉知幾であれば、それを承認したであろう。しかし、そうした物語の氾濫に、裴松之は苦悩した。自らの「理」の中に正しさの基準を求めた裴松之は、それを「史」として認めることに躊躇があったのである。

やがて『春秋』は、王安石により「斷爛朝報」(ばらばらの官報)とされ、その欠文は孔子の義が示されるようなものではなく、単なる不備と見なされるに至る。しかし、「古典中國」における「史」の規範としての『春秋左氏傳』の地位は高く、裴松之の思いは、孫盛個人への批判として吐露されたに過ぎなかった。裴松之の史學を「近代歴史学」の端緒と扱うことは、中国に「近代」の萌芽を探求しようとする、あまりにも性急な主張であろう。なお、劉知幾の「異聞」への対応、およびその史學と「近代歴史学」との隔絶については、稿を改めて論ずることにしたい。

注

- (1) 沈家本「三国志注所引書目序」(『沈奇移先生遺書』中国書店、一九九〇年)。裴松之の引用書数については諸説あり、たとえば高敏「三国志」裴松之注引書考」(『河南科技大学学报』社会科学版二五—三、二〇〇七年)は、二五八種を数える。

- (2) 宮岸雄介「裴松之の史学観」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第一分冊四二—一、一九九六年)は、裴松之は陳壽に代わって三國の歴史の真相を解明しようとしたとし、史家は真実をそのまま書くべきという唐代の劉知幾「史通」の先駆けとなるような史学意識を見出すことができる、とする。また、王文進「裴松之の『三国志注』新論——三國志的解構与重建——」(新文豊出版、二〇一七年)は、裴松之の注の目的は、陳壽の後に出現した史料と陳壽が採用しなかった史料により、三國史の真相を再構築することであった、とする。

- (3) 林田慎之助「六朝の史家と志怪小説——裴松之の『三国志』注引の異聞説話をめぐって——」(『立命館文学』五六三、二〇〇〇年)。

- (4) 渡邊義浩『古典中國』における小説と儒教(汲古書院、二〇一七年)。

- (5) 石井仁「曹操——魏の武帝——」(『新人物往來社』、二〇一〇年)なお、曹操集團の軍師制度については、石井仁「軍師考」(『日本文化研究所研究報告』二七、一九九一年)を参照。

- (6) (荀) 攸深密有智防、自從太祖征伐、常謀謨帷幄、^①時人及子弟莫知其所言。……公達前後凡畫奇策十二、^②唯(鍾)繇知之。繇撰集未就、會薨。故世不得盡聞也(『三國志』卷十 荀攸傳)。

- (7) 臣松之案、^①攸亡後十六年、鍾繇乃卒。^②撰攸奇策、亦有何難。而年造八十、猶云未就。遂使攸從征、機策之謀不傳於世、惜哉(『三國志』卷十 荀攸傳注)。

- (8) 太祖拔白馬還、遣輜重循河而西。袁紹渡河追、卒與太祖遇。諸將皆恐、說太祖還保營。攸曰、^①此所以禽敵、奈何去之。^②太祖目攸而笑。遂以輜重餌賊。賊競奔之、陳亂。乃縱步騎擊、大破之、斬其騎將文醜。太祖遂與紹相拒於官渡。軍食方盡、攸言於太祖曰、紹運車且暮至。其將韓勳銳而輕敵、擊可破也。太祖曰、誰可使。攸曰、徐晃可(『三國志』卷十 荀攸傳)。

- (9) 臣松之案諸書、韓勳或作韓猛、或云韓若、未詳孰是(『三國志』卷十 荀攸傳注)。

- (10) 袁紹運穀車數千乘至。公用荀攸計、遣徐晃・史渙邀擊、大破之、盡燒其

車(『三國志』卷一 武帝紀)。

- (11) 按、三國雖歷年不遠、而事關漢・晉、首尾所涉、出入百載。注記紛錯、每多舛互。其壽所不載、事宜存錄者、則固不畢取以補其闕。或同說一事、而辭有乖雜、或出事本異、疑不能判、竝皆抄內以備異聞。若乃紕繆顯然、言不附理、則隨違矯正以懲其妄。其時事當否、及壽之小失、頗以愚意有所論辯(中華書局本『三國志』の卷末に所収)。

- (12) 渡邊義浩「史」の自立——魏晉期における別伝の盛行について——」『史学雑誌』一一二—四、二〇〇三年、『三國政權の構造と「名士」汲古書院、二〇〇四年に所収)。しかし、隋唐以降の史學において、裴松之の方法論が主流となることはなかった。それは、『漢書』に注を付けた顏師古の經學的方法論が主流となったことによる。顏師古注については、渡邊義浩「班孟堅の忠臣——顏師古『漢書』注にみる「史」の「経」への回帰——」(『東洋文化研究所紀要』一七二、二〇一七年)を参照。

- (13) 山陽公載記曰、(馬)超因見(劉)備待之厚、與備言、常呼備字。關羽怒、請殺之。備曰、人窮來歸我。卿等怒、以呼我字。故而殺之、何以示於天下也。張飛曰、如是、當示之以禮。明日大會、請超入。羽・飛竝杖刀立直。超顧坐席、不見羽・飛。見其直也、乃大驚、遂一不復呼備字。明日歎曰、我今乃知其所以敗。為呼人主字、幾為關羽・張飛所殺。自後乃專事備(『三國志』卷三十七 馬超傳注)。

- (14) 臣松之按、以為、超以窮歸備、受其爵位。何容傲慢而呼備字。且備之入蜀、留關羽鎮荊州。羽未嘗在益土也。故羽聞馬超歸降、以書問諸葛亮超人才可誰比類。不得如書所云。羽焉得與張飛立直乎。凡人行事、皆謂其可也。知其不可、則不行之矣。超若果呼備字、亦謂於理宜爾也。就令羽請殺超、超不應聞。但見二子立直、何由便知以呼字之故、云幾為關・張所殺乎。言不經理、深可忿疾也。袁暉・樂資等諸所記載、穢雜虛謬、若此之類、殆不可勝言也(『三國志』卷三十七 馬超傳注)。

- (15) 曹魏の王肅による「理」に基づく感生帝說批判については、渡邊義浩「王肅の祭天思想」(『中国文化——研究と教育』六六、二〇〇八年、『西晉』儒

教国家」と貴族制」汲古書院、二〇一〇年に所収)。また、そうした人間の精神的な営みを「魏晉の新」と捉えることは、加賀栄治『中国古典解釈 史』魏晉篇(勁草書房、一九六四年)を参照。

- (16) 袴田郁一「裴松之『三國志注』の史料批判と劉宋貴族社会」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六四、二〇一九年)。

- (17) 「河東の裴氏」については、周征松「魏晉隋唐間的河東裴氏」(山西教育出版社、二〇〇〇年)を参照。

- (18) 渡邊義浩「春秋左氏伝序」と「史」の宣揚」(『狩野直禎先生米寿記念 三國志論集』三國志学会、二〇一六年)。

- (19) 不知(樂)資・(袁)暉之徒、竟爲何人、未能識別然否、而輕弄翰墨、妄生異端、以行其書。如此之類、正足以誣罔視聽、疑誤後生矣。寔史籍之罪人、達學之所不取者也(『三國志』卷六 袁紹傳注)。

- (20) 案張璠・虞溥・郭頒皆晉之令史。璠・頒出爲官長、溥鄱陽内史。璠撰後漢紀、雖似未成、辭藻可觀。溥著江表傳、亦粗有條貫。惟頒撰魏晉世語、

① 寔之全無官商、最爲鄙劣、以時有異事、故頗行於世。② 干寶・孫盛等多采其言以爲晉書。其中虛錯如此者、往往而有之(『三國志』卷四 三少帝紀注)。

- (21) 「春秋」は、王道の正しいあり方、人間世界の秩序原理と価値の根拠を明示した經典であり、杜預の『春秋左氏經傳集解』は、「史」の尊重する事實により義例を説くことが、公羊・穀梁學派や左氏學派の先学よりも、優れていると主張するものであった(注18 所掲渡邊論文)。また、司馬彪の「續漢書」が後世の鑑としての「漢」を描くことについては、渡邊義浩「司馬彪の修史」(『大東文化大学漢学会誌』四五、二〇〇六年、『西晉』儒教国家」と貴族制」前掲に所収)を参照。

- (22) 渡邊義浩「古典中国」における史学と儒教」(『学際化する中国学』汲古書院、二〇一九年)を参照。

- (23) 雜喉潤「裴松之の覚え書き」(『名古屋自由学院短期大学研究紀要』三三、二〇〇〇年)。

- (24) 孫盛晉陽秋曰、盛以永和初從安西將軍平蜀、見諸故老、及姜維既降之後、

密與劉禪表疏、說欲僞服事鍾會、因殺之以復蜀土、會事不捷、遂至泯滅、蜀人於今傷之。盛以爲古人云、非所困而困焉、名必辱、非所據而據焉、身必危。既辱且危、死其將至、其姜維之謂乎。鄧艾之入江由、士衆鮮少、維進不能奮節、退不能總帥五將、擁衛蜀主、思後圖之計。而乃反覆於逆順之間、希違情於難冀之會、以衰弱之國、而屢觀兵於三秦、已滅之邦、冀理外之奇舉、不亦闇哉。〔三國志〕卷四十四 姜維傳注。

(25) たといえば、同じく東晉の史家である常璩が、桓温が蜀を東晉に回復したことを機に『華陽國志』を著し、「大一統」を賛美したことは、渡邊義浩「常璩『華陽國志』にみえる「一統」への希求」〔RELASJOURNAL〕六、二〇一八年を参照）。

(26) 臣松之以爲、(孫)盛之譏(姜)維、又爲不當。于時鍾會大衆、既造劍閣、維與諸將列營守險、會不得進、已議還計。全蜀之功、幾乎立矣。但鄧艾詭道傍入、出於其後、諸葛瞻既敗、成都自潰。維若回軍救內、則會乘其背。當時之勢、焉得兩濟。而責維不能奮節、擁衛蜀主、非其理也。會欲盡坑魏將以舉大事、授維重兵、使爲前驅。若令魏將皆死、兵事在維手、殺會復蜀、不爲難矣。夫功成理外、然後爲奇。不可以事有差(牙)〔五〕、而抑謂不然。設使田單之計、邂逅不會、復可謂之愚闇哉。〔三國志〕卷四十四 姜維傳注。なお、傍線部について、百衲本は「牙」に作るが、『三國志集解』により「五」に改めた。

(27) 孫盛魏氏春秋云、答諸將曰、劉備、人傑也。^①將生憂寡人。臣松之以爲、史之記言、既多潤色。故前載所述、有非實者矣。^②後之作、又生意改之。于事實也、不亦彌遠乎。凡孫盛製書、^③多用左氏、以易舊文。如此者非一。嗟乎、後之學者將何取信哉。且魏武方以天下勵志、而用夫差分死之言、尤非其類。〔三國志〕卷一 武帝紀注。

(28) 王拜稽首曰、寡人不佞、不能事越、以爲大夫憂。拜命之辱。與之一筆珠、使問趙孟曰、句踐將生憂寡人。寡人死之不得矣。〔春秋左氏傳〕哀公傳二十年。

(29) 魏書曰、太祖以卓終必覆敗、遂不就拜、逃歸鄉里。從數騎、過故人成阜

呂伯奢、伯奢不在。其子與賓客共劫太祖、取馬及物。太祖手刃擊殺數人。世語曰、太祖過伯奢、伯奢出行。五子皆在、備賓主禮。太祖自以背卓命、疑其圖己、手劍夜殺八人而去。孫盛雜記曰、太祖聞其食器聲、以爲圖己、遂夜殺之。既而悽愴曰、寧我負人、無人負我。遂行。〔三國志〕卷一 武帝紀注。

(30) 孫叔曰、進之。^①寧我薄人、無人薄我。詩云、元戎十乘、以先啓行。^②先人也。軍志曰、先人有奪人之心、薄之也。遂疾進師、車馳卒奔、乘晉軍。〔春秋左氏傳〕宣公十二年。

(31) 臣松之以爲、^①春秋之義、內大惡諱、小惡不書。文帝之不立甄氏、及加殺害、事有明審。^②魏史若以爲大惡邪、則宜隱而不言、若謂爲小惡邪、則不應假爲之辭、而崇飾虛文乃至於是。異乎所聞於舊史。推此而言、其稱下甄諸后言之善、皆難以實論。^③陳氏刪落、良有以也。〔三國志〕卷五 甄皇后傳注。

(32) 今應真・井波律子『正史三國志』I (筑摩書房、一九九二年)に、すでに指摘されている。

(33) (替) 康見孫登、登對之長嘯、踰時不言。康辭還曰、先生竟無言乎。登曰、惜哉。〔三國志〕卷二十一 王粲傳注引〔晉陽秋〕。

(34) (替) 康欲與之言、登默然不對。踰時將去、康曰、先生竟無言乎。登乃曰、子才多識寡。難乎免於今之世。〔三國志〕卷二十一 王粲傳注引〔魏氏春秋〕。

(35) 此二書皆孫盛所述、而自爲殊異如此。〔三國志〕卷二十一 王粲傳注。

(36) 子曰、不有祝鮀之佞、而有宋朝之美、難乎免於今之世矣。〔論語〕雍也篇。

(37) (帝) 遂見王經等、出黃素詔於懷曰、是可忍也、孰不可忍也。今日便當決行此事。入白太后、遂拔劍升輦、帥殿中宿衛者頭、官僮擊戰鼓、出雲龍門。〔三國志〕卷四 三少帝紀注引〔魏氏春秋〕。

(38) 孫盛改易(陳)泰言、雖爲小勝(干寶)、然檢盛言諸所改易、皆非別有異聞、率更自以意制、多不如舊。凡記言之體、當使若出其口。辭勝而違實、固君子所不取。況復不勝而徒長虛妄哉。〔三國志〕卷二十一 陳羣傳附陳泰傳注。